

## イグナチオの霊操 第8回 7月9日（金）

テーマ 「UAPs 排除される人と共に」 柴田神父

### 神はあらゆる方法で私たちと交わる

イグナチオは、16世紀にしては珍しいほど様々なメディア（媒体）を駆使しました。恩人や友人に頻繁に手紙を書きました。会員たちにも活動の報告を求めました。劇を観ることを好み説教にも反映させました。あらゆる手段を用いて言いたいことを伝えようとしました。イグナチオは「神も同じようにして人間と関わろうとしている」と確信していました。神はあらゆる手段を使って人間と交わる。祈りだけでなく、世界の出来事、会員の働き、日常生活、心の動きなど・・・を通して。今日のテレビ番組は衛星放送含めて無数にありますが、神は創造されたものすべてを使って発信しています。神は、様々な方法で毎日私たちに語っています。

### UAPsもその1つ

Universal イエズス会全体の Apostolic 使徒的な Preferences 優先させること s 複数

UAPs（2019～2029年 イエズス会使徒職全体の方向付け）

全イエズス会員宛てのソーサ総長からの書簡 2019年6月（表現をわかりやすく変えています）

イエズス会の望みは、神へのより大いなる奉仕です。普遍的な善を求めながら、イエスからのミッションに協働する方法を探します。今の時代に、教会に、社会により必要のあることを探し、エネルギーを注ぐことで最善の貢献方法を探します。

## 4つの選択肢 (Preferences)

### 1 霊操および識別を通して神への道を示すこと (1年間の霊操講座の内容)

聖イグナチオの霊操は、世界の多様な社会の中で、主イエス・キリストの生き方に倣う優れた手段です。霊操は、いつの時代でも深い霊的な体験へと導きます。時代に合った、多様な方法で霊操を提供することが大切です。また、識別は、イエス・キリストに従う生き方を選ぶ大切な習慣で、個人でも共同体でも、その感覚を磨いて活用することが大切です。

### 2 和解と正義のミッションにおいて、貧しい人々、世界から排除された人々、人間としての尊厳が侵害された人々と共に歩むこと (今回 7月9日のテーマ)

傷つけられ、疎外され、周辺に追いやられ、人として貧しくされた人々や共同体とともに歩む。聖書にあるように、主は貧しい人々の叫びに応え、解放するために人となられた。その姿に倣います。私たちは、移住者、強制移住させられた人々、難民、そして戦争および人身売買の被害者の世話に取り組みます。

### 3 希望に満ちた未来の創造において若い人々とともに歩むこと (7月16日のテーマ)

青年期は、社会に出る前に、人生の意味を問い、神の国の実現のために何をするか、決定していく時期です。この時期に、若者と共に歩み、将来の夢の識別の手伝いをし、イエスの教えを一緒に伝えることはイエズス会の大切なミッションです。若い人々には、新しい視点で将来を見る力があります。若い人々は、新しい時代の担い手です。イエズス会員は誠実な生き方を示し、霊的

な深みを分かち合うことが求められます。→キリスト教的な真の自己の形成（霊操 第5回）

#### 4. 「ともに暮らす家」（地球）への配慮と世話を協働して行う（7月23日のテーマ）

回勅『ラウダート・シ』でフランシスコ教皇は、人類はみな、「母なる地球」である被造界を大切にすることを共有している。「神から賜ったよきものを、人間が無責任に濫用してはいけません。濫用によって生まれた傷で、被造物は叫びを上げている」

支配的な経済システムによって引き起こされる環境破壊は世代を超えて被害を与えている。今、地球に住む人々、特に若い世代に影響を及ぼすだけでなく、将来の世代の生活にも悪影響が及ぼされる危険がある。持続可能な生産システムを構築し、富が正当に分配される世の中を目指す必要がある。自然を大切にすることは、神の創造のわざを礼拝することです。これまでの生産・経済システムを改め、生活習慣を変える必要があります。

### 今回のテーマ 「排除される人と共に」イグナチオの実践例

#### 第9章 故郷スペインに帰る

『ある巡礼者の物語 イグナチオ・デ・ロヨラの自叙伝』イグナチオ・デ・ロヨラ著 門脇佳吉訳

#### 注解8

故郷での性的乱れに対して、有効な手段を使ってこの悪習をやめさせた。イエズス会創立時に、ローマで「聖マルタの家」を造り、性的悪習から婦人たちを救う努力もした。

#### 注解9

故郷で貧しい人たちの公的な援助隊をつくらせ援助をした。貧困者に対するこのような処置と配慮は、自ら貧しい生活をした経験から、それがどれほど惨めな生活をしているかを目のあたりにしていたからである。(一部表現を変えています)

## 柴田神父が難民支援を始めたきっかけ

2015年9月：シリア難民の3歳のアイラン君がトルコの海岸に打ち上げられた写真を見ました。アイラン君の4人家族が乗っていた難民ボートはギリシャ領の島に向かう途中で沈没し、お父さんだけが助かりました。( <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/090700247/> )

10月：イグナチオ教会での「難民の声を聞こう！」に参加

12月：さらに難民のことを知ろうと「なぜドイツはシリア難民を受け入れるのか？」のシンポジウムに参加。今は日本の大学で先生をされているハンガリー出身の方の体験が心を動かしました。

1965年ハンガリー動乱のクリスマスのころ、10歳の私は家族とハンガリーを離れることになった。「自分は難民になる。家もなくなる、国もなくなる・・・これからどうなるの？不安でいっぱいだった」そんなとき、駅で、同じ年くらいのドイツの子どもが箱をくれた。きっと、言葉が違う私たちに何かを感じたのでしょう。開けてみると中にケーキが入っていた。きっと楽しみにしていたクリスマスケーキだったでしょう。自分は難民になる・・・不安がいっぱいある。「でも、いいこともある。そう思って頑張った。50年経っても忘れられない。思い出すと涙が出てくる。」

同い年の子の優しさが難民を支え続けた→子どもの善意には力がある

### もう1つの動機

- ・神学部の卒論ゼミで一緒だった女性が医師を目指してイギリスで勉強していましたが急死。
- ・彼女がしたかったことは何だろう？
- ・私に何ができるだろうか？（身近な人の死によって、自分には遠いと思っていたことを実行す

る力になりました。)

### モンテッソーリ教育の園児さんへの難民支援のお話（デニスくんのお話）

幼稚園で難民のお友だちのどんなことが大変か？ 考えてもらい、みんなの募金で、寝るところ、食べるもの、お風呂に入れる、言葉を覚えてお友だちが作れるようになるお話しました。

### 幼稚園の先生による難民支援のお話

(子どもたち、先生たちから写真提供の了解を得ています)

幼稚園の先生は、絵本を読んだり工夫をしました。

難民のお友だちの“水”と日本のお友だちの“水”の違い。(あんまり綺麗な水じゃないけど、遠くまでくみにくるんだね。 蛇口をひねったらすぐにきれいなお水が出てくるね。)

難民のお友だちの“ごはん”と日本のお友だちの“ごはん”の違い。(小魚ととうもろこしの質素なご飯だけど嬉しそうだね。 お肉やお魚、デザートまであるね。)

難民のお友だちの“おうち”と日本のお友だちの“おうち”の違い。(狭いし強い風が吹いたらどうなるか、心配です。 台風が来ても大丈夫な強いお家です。)

先生がお話をしてくれた後、子どもたちが資料を読み直します。

欲しいものを我慢したり、お手伝いしたことを募金にして、お祈りしました。

りまちゃんのお祈りです。(山口天使幼稚園 写真で説明)

「こまっているおともだちが あぶなくにくから あぶなくにくにに もどれますように」

戦争だったり、命が危なくなつて日本に逃げてきたけど、本当は自分の国に帰りたいはず。その気持ちが叶えられるようにお祈りしました。

みゆうちゃんの運動会でのお祈り (写真で説明)

「せかいじゅうのおともだちが うんどうかいできる へいわがきますように」

運動会の閉会式でのお祈りです。大人も心を打たれて聞き入っていました。もちろん、みゆうちゃんが自分で考えたお祈りです。「今日は、楽しい運動会ができて良かった。世界中のお友だちにもこんな楽しい運動会をして欲しい！」 真っ直ぐな心でお祈りしました。

さえちゃんの言葉 (写真で説明)

マリア祭でも、難民のお友だちのことをお祈りしていたさえちゃん言葉です。

「えんちょうせんせいがつくった きょうりゅう🦖🦖チョコ なんみんなのおともだちといっしょに たべられたらいいね」

恐竜は、イエズス会の第3修練でオーストラリアに行って好きになりました。(写真で説明)

クリスマスと復活祭のミサに来てくれた幼稚園のお友だちのために作ってました。(写真の補足

難民のお友だちのために板チョコ 60 枚で 100 個の恐竜チョコを作りました。チョコを刻んで、

溶かして、形に入れて、固めて、外します。教会のパントリーで作りました。ティラノサウルス、

トリケラトプス、プテラノドンたちがいます)

5月、難民支援協会さんに届けてきました。

さえちゃんの「なんみんなのおともだちといっしょに たべられたらいいね」の言葉で届ける気持ちになれました。

## 難民支援協会へ募金する理由 (<https://www.refugee.or.jp>)

- ・現地に直接支援を届けるのは難しい現状があります。
- ・なぜ難民が日本に渡ってくるのでしょうか？ 命の危険に迫って、避難先を探していて、最初にビザが降りたのがたまたま日本だった人が多いです。日本は観光ビザを割と簡単におろします。けれども、難民認定のハードルはとて高く試練が待っています。2019年は10,375人が難民申請を行い、認定されたのは44人だけでした。(難民認定率は、日本：0.4% ドイツ：26%、アメリカ：30%、カナダ：56% 先進国の中で日本はとりわけ低くなっています)
- ・日本にたどり着いたものの、すぐに所持金が尽きて路上生活になる難民がいます。せつかく助かった命のために何かしたい。その人たちを助けるのが難民支援協会です。
- ・ある団体は、国際支援の機関として知られていますが、募金の約2割は広報費に当てられています。また自分が献金した分が、いつどのように使われたのかのフィードバックもありません。難民支援協会ですと使われ方の報告があります。

### 使われ方の報告の一例

2016年1月、アフリカのコンゴ民主共和国から園児さんと同じくらいの2人のお子さんを連

れて、逃れてきたお父さんがおられました。難民支援協会が19部屋確保している一時宿泊施設は他の難民の方で満室でした。でも、小さなお子さん2人が寒空の下で過ごすのはあまりにも酷だと心を痛めました。幼稚園のクリスマス募金、子どもたちがいろいろなことを我慢して、たとえば、大好きなおもちゃのガチャガチャや、お菓子を我慢した募金で、急遽、ホテルを手配しました。この家族を野宿から助けることができました。お父さんは子どもたちを守るためにも必死です。子どもたちはその様子を察してか、とてもお利口で、泣くこともわがままを言うこともなく、お父さんの横にぴったりついて、相談が終わるのを静かに待っています。ホテルは事務所から一駅以上離れたところにありますが、いつも一緒に事務所まで歩いて来られ、職員は健気な子どもたちの姿にいつも心を打たれます。日本で生活していくことは一人でも家族でも簡単ではありません。献金は、この家族をはじめ今必要とされる皆さんのために使われました。

・昨年・今年は、コロナ・ウイルスの影響で、支援活動も難しくなっています。また、せつかく手に職をつけた方が失職しています。<https://www.refugee.or.jp/jar/report/2020/10/07-0000.shtml>

・今、最も支援が必要な方へ難民支援協会は募金を活用してまいります。

**難民支援協会 石川えり代表の講演会** (2019年10月19日広島 エソール広島 おりづるタワーにて)

私たち日本人は日頃「平和だな」と実感することはあまりありません。

水道をひねれば飲める水が出てくること。安心して空気が吸えること。

「珍しい」「ありがたい」と実感する機会がないものです。



一方、紛争が起きている国から日本に来た人は「珍しい」「ありがたい」と感じています。

「日本の人はまっすぐ歩いてるからすごい」と思う。

「どうして？ 背筋を伸ばしてまっすぐ歩いてるということ？」と聞くと、

「誰もかがんでないから」と答えます。彼女がいたところでは、よく銃の発砲があって、さっと身を伏せないといけない。何が起きるか？ 注意しながら歩かないといけない。

「日本には、そんな心配がなくて、まっすぐ歩いてるから“すごい”。」と言います。

ある女性は、花火がすごく怖かった。私たち日本人は「ドン！」と鳴ると「花火どこだろう？」と探す。でも、彼女には花火の音が、爆撃の音にしか聞こえません。花火大会の間、ずっと毛布をかぶって怖がっていました。

ミャンマーの軍事政権下から逃げてきた人。「日本では、テレビでみんなが政治家の悪口言っていてすごいね。私の国ではすぐに捕まってしまう。」言論が自由、平和であることがとてもありがたい。

## 「海は燃えている イタリア最南端の小さな島」 ジャンフランコ・ロージ監督

2016年 第89回 アカデミー賞“長編ドキュメンタリー賞 本編 114分+特典映像 10分

第66回ベルリン国際映画祭金熊賞<グランプリ>

ランペドゥーサ島は面積20平方キロ、海岸線は南70マイル、北120マイル。人口5千人の島に、この20年間で約40万人の移民が島に上陸した。最近では年間約5万5千人、1日平均150人にもなる。アフリカや中東から命がけで地中海を渡り、ヨーロッパを目指す難民・移民の玄関

になっている。シチリア海峡で溺死した移民の数は約1万5千人と推定される。島には巨大な無線施設が建ち、港には数多くの救助艇が停泊している。ひとたび難民たちが乗った船から救難の連絡が入ると、無線が飛び交い、ヘリコプターが飛び立つ。夜の海を照らすサーチライトが難民たちを探す。

フランシスコ教皇も、就任後初めての海外司牧行事でこの島を訪れている。

### バルトロ医師（この島でただ一人の医師）の言葉

この船には840人乗っていた。ここが一等の乗客なんだ。外にいられるからね。値段は1500ドル。

この中段にいるのが2等船室、値段は1000ドル。下の舟倉にはとにかく大勢いるはずだ。値段は

800ドルで3等客室だ。「船から降りろ」というと次々に降りてくる。終わりが無い。何百人の女

子供が・・・ひどい状況だった。特に船倉の人たちがね。船に乗ってから7日間、水も飲めず、ろ

くな食べ物もなく、疲れ切っていた。わたしは68人を緊急治療室に運ばせた。この少年は、全身

やけどで、年はせいぜい14歳くらいだ。こんな子が大勢いた。燃料による化学的な火傷を負って

いた。壊れかけたゴムボートに乗せられて、航海の間中、ポリ容器に燃料を入れさせられた。その

燃料が漏れて、海水と混じり合い服に染み込む。それが体には有害で重度の火傷を起こす。治療も

実に大変なんだ。気の毒だが痕も残る。命を奪うこともある。こうした人々を救うのは全ての人の

務めだ。救えたときは満足感もある、嬉しい。手助けできた喜びだ。残念だが、救えない時もある。

目の前にはひどい光景、死体の山、子供達・・・一番嫌な仕事が残っている、死体検分という仕事

がね。大勢見てきたよ、多すぎるほど。同僚たちには言われるんだ。「それだけ見たら見慣れただ

ろう」と。とんでもない。見慣れることなど決してないね。死んだ子供、妊婦・・・沈みかけた船

で出産した母親は、へその緒がまだつながっていた。彼らを袋に入れ、棺に納めサンプルを採取し、

指や肋骨を切除する。子供の耳を切ることもある。つまり、死後も彼らは冒瀆を受けることになる。

これも務めと思ってやっているがね。そのうちに怒りがたまり、腹の中が空っぽになる。穴があく

んだ。あれこれ考え、夢にみる、何度も悪夢となって蘇る。何度も、何度もね。

### ナイジェリアの若者のラップでの証言

これは俺の証言だ。ナイジェリアでは暮らせない。大勢死んだ。爆撃も受けた。爆撃を受けたから

ナイジェリアから逃げた。砂漠に逃げた。サハラに逃げて大勢死んだ。サハラに逃げて大勢死んだ。

殺され、犯され、くらしもたたない。今度はリビアに逃げた。リビア（子供たちは臓器売買、女性

はレイプから逃げるために・・・毎年5万人が国外に逃げている）にはイスラム国の連中がいて、そ

こにもいられなかった。ひざまづいて俺たちは泣いた。“どうすりゃいいんだ？”人もかくまって

くれない。だから今度は海に逃げた。

海までの旅の途中、大勢が命を落とした。海に沈んだ仲間もいる。ボートに乗ったのは90人。助

かったのは30人だけ。今、俺たちは生きている。海は、渡っていける場所じゃない。海は人が通

れる道じゃない。だけど俺たちは生きている。命を賭けなきゃ助からない。人生自体が賭けだから。

何週間もサハラ砂漠にいる中で、仲間が大勢餓死した。大勢が自分の小便を飲んだ。生き残るため

に。自分の小便を飲んだんだ。それは命を賭けた旅だから。砂漠にいるうちに水が尽き、自分の小

便を飲んだだ。“神よ、砂漠では死にたくないよ”リビアに逃げても、誰も同情はしてくれない。

アフリカ人だから誰も助けない。牢屋に閉じ込められ、1年過ごした奴がたくさんいる。6年暮ら

した奴がたくさんいる。大勢が牢屋で死んだ。リビアの監獄はひどかった。食べ物はなく、毎日殴

られ、水もなく、大勢そこを逃げ出した。今、俺たちはここにいる。神は助けてくださった。死を

恐れず海に出よう。リビアの監獄を生き延びたんだ。海でなど死ぬもんか。海に出てこうして俺た

ちは助かった。

## NHK スペシャル 世界は私たちが忘れた ～追い詰められたシリア難民～

報告者 金本麻理子ディレクター：2020年1月、レバノンでの取材を始めました。向かったのはベイルートから車で1時間半、シリアとの国境に近い（難民キャンプがある）ベガー県です。

ビニールを張っただけの簡易な非公式難民キャンプ。隣国のレバノンにはシリアから多くの難民が押し寄せ、その数は推定120～160万人です。現在レバノンの人口の4人に一人はシリア人と言われ、キャンプでは常に過密な状態が続いています。

語り手：祖国シリアの内戦が始まったのは、9年前、2011年3月、自由を求める大規模なデモを政府軍は武力で弾圧します。過激な組織に外国の利害が絡み、内戦は泥沼化していきます。9年間で死者は38万人を超え、660万にのぼるシリア難民が国外へ逃れました。

金本ディレクター：（ヨルダンでの写真）私はシリア難民の人々を、2012年から追ってきました。心に刺さったのは祖国を離れて苦しむ難民の子供と、女性たちの姿でした。近年、レバノンに暮らす難民たちが、困窮を極めていると聞き、ベガー県を尋ねたのです。

語り手：エルハームは、8人家族の長女です。父親は連日、日雇いの仕事を探しています。エルハームには1つ年上の兄がいました。しかし、去年、衝撃的な事件に巻き込まれます。その日の夕方、家の前の庭で遊んでいた兄は、何者かに連れ去られてしまったのです。

エルハーム：くまなく探し回ったけど、お兄ちゃんは見つからなかった。何もわからなかった。でも、お兄ちゃんは生きてるはずだと思っていた。(目頭を抑え涙を浮かべる)

語り手：その後、兄の行方は Facebook の投稿写真でわかりました。ゴミ捨て場に放置された兄の死体が写っていたのです。

母：ゴミ箱のそばに息子を見つけた。あの子は横たわっていた。(間) シャツが上にまくられて、ズボンが短く切られていた。お腹に何かされてた。ああ神よ、決して彼らを許しませんように。(腹部を触りながら) ここを縫われていた。欲しいのなら、私の腎臓をあげたのに。(嗚咽。下の娘がすり寄る。エルハームも目頭を抑える。母がエルハームを抱き寄せる)

エルハーム (部屋の外で話す)：お兄ちゃんがかわいそう。心臓も肝臓も取られたかも？ 目も高く売れるんだって。心臓もとても高く売れる。私たちがシリア人だから、誰かが言っていた。「誘拐されたのはシリア人？ レバノン人？ シリア人なら別にいいや」って。私はその人に言った。「同じ体と血じゃないの？ シリア人もレバノン人も同じ人間でしょ？」 でも、お兄ちゃんが戻ってこないことは確か。私が家族を支えなくちゃ。お母さんはとても疲れているから助けたいの。本当は働きたくないけど私が働かないと、家族と妹たちが満足に暮らせるように。

語り手：難民を支援する国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) は爆発事故で著しい被害を受けた 2 万 5 千世帯から支援を始めました。さらに、コロナに感染した難民を安全に収容する隔離ユニットを増設しました。しかし、支援は十分に行き届いてはいません。

UNHCR レバノン 代表 ミレイユ・ジラルールさん：レバノン にいるシリア難民の極貧層は

(1 日の支出が 2.9 ドル以下) 73%に達しています。生存ギリギリを強いられている人々です。

今、この極貧層は大規模爆発、コロナ、経済危機によって増加し、難民の 90%になろうとしてお

り、私たちは途方に暮れています。援助を求められてもある家族は支援し、ある家族は断らざるを

得ません。私たち支援者にとってはとても辛いことです。レバノン で人道支援に携わる者は皆、

燃え尽きています。声を大にして伝えたいのです。私たちだけでは、難民もレバノン 人も救うこ

とはできません。苦闘している彼らに、国際社会は手を差し伸べるべきです。

## まとめ UAPs 「排除される人と共に」

- ・ 排除される人たちは、もちろん難民に限りません。
- ・ 難民支援に取り組むことで視野が広がりました。
- ・ 幼稚園で難民支援を呼びかけることで、子どもたちの柔らかい心に触れられました。
- ・ 司祭が発信する影響力。今年は、カブトムシを通じての支援も。（楽しみと支援をつなげる）

カブトムシ飼育日記（難民支援の取り組み）

<https://shibatakiyoshisj.wixsite.com/homily>

- ・ 話を聞くだけでなく、支援につなげましょう。「言葉でなく行いで信仰を示しましょう。」

## 終わりの祈りに代えて 緒方貞子さんの「難民の保護」

エル・サルバドルを訪れた時のこと。・・・まだ厳しい政府軍の弾圧から身を守るため、彼らは  
帰還難民の集落をつくって相互扶助の生活を続けていた。そのような帰還難民部落の集落であるチ

サルテナンゴ州のグワヒリーグの中心にあったのは、一人のスペイン人イエズス会司祭コーティエ  
ナ神父であった。彼は、サン・サドバドルのイエズス会大学の教授であるとともに、地方の数部落  
を担当しているが、数年前に起こった軍による6名のイエズス会司祭の惨殺を逃れたのは、たまた  
ま村落巡回中であったためという。

この司祭は、帰還難民部落の粗末な保育所の一隅に暮らしていた。「ミサをあげ、彼らの中で寝  
泊まりしている事実が、彼らを取り巻く政府軍に対する最大の防御であり、また住民にとっての安  
全の保障である」と難民の一人が語ってくれた。・・・危険や不安の日々にある難民を最終的に保  
護するのは、彼らと運命をともにする人々の道義的な存在の威力である。

弱い立場にあるのはなにも難民ばかりではない。マイノリティー、外国人、障がい者・・・保護を  
必要とするすべての人々の近くにあって、彼らを見守る役割こそ、キリスト者に期待される道義的  
な力ではなかろうか。

「排除される人」に心を向けて、できることとしていきましょう。

## 振り返りの質問

Q. これまでに「排除された方」と関わったことがあるでしょうか？

Q. 今回の霊操から、何か始めようと思ったことがありますか？



## 参考資料

“What is Ignatian spirituality ? ” 『イグナチオの靈性とは?』

David L. Fleming, SJ著 Loyola Press A Jesuit ministry出版 2008年発行

『ある巡礼者の物語 イグナチオ・デ・ロヨラの自叙伝』イグナチオ・デ・ロヨラ著 門脇佳吉訳

『海は燃えている イタリア最南端の小さな島』 ジャンフランコ・ロージ監督 2016年

<https://giao.yahoo.co.jp/store/title/174C88?trailer=A174C88001999H01>

NHK スペシャル 世界は私たちが忘れた ～追い詰められたシリア難民～ 2020年10月24日放送

「神学ダイジェスト」1992年 72号 「難民の保護」巻頭言より

## リンク

[https://www.refugee.or.jp/assets/postfile/about/jar-ar\\_2016.pdf](https://www.refugee.or.jp/assets/postfile/about/jar-ar_2016.pdf) (19ページに柴田神父のコメントがあります)

<https://www.jcarm.com> 日本カトリック難民移住移動者委員会

<https://www.jcarm.com/2021/02/18/1738/>

オンラインセミナー 入管法改定とその課題 駒井知会 弁護士

## 参考図書

- 『緒方貞子 私の仕事』 緒方貞子著 草思社 2002年
- 『共に生きるということ』 緒方貞子著 PHP 研究所 2011年
- 『なんみんって よばないで』 ケイト・ミルナー 訳 こでら あつこ 訳 合同出版  
2019年
- 『ほんの すこしの勇気から』 日本国連 HCR 協会ボランティア・絵本プロジェクトチーム 求  
龍堂 2005年
- 『君とまた、あの場所へ シリア難民の明日』 安田菜津紀著 新潮社 2016年
- 『ランドセルは海を越えて』 内堀タケシ 写真・文 ポプラ社 2013年
- 『へいわって どんなこと?』 浜田桂子著 童心社 2011年

- 『へいわって すてきだね』 安里有生 詩 長谷川義史 画 ブロンズ新社 2014年
- 『子どもたちが生きる世界はいま』 豊田直巳著 七つ森書館 2005年
- 『私はどこで生きていけばいいの?』 ローズマリー・マカーニー 文 西田佳子 訳 西村書店 2018年
- 『マララさん こんにちは』 ローズマリー・マカーニー 文 西田佳子 訳 西村書店 2014年
- 『まいごのねこ』 ダグ・カイツ、エイミー・シュローズ 文 スー・コーネリンソン 絵 野沢佳織 訳
- 『難民と移民 いま、世界のあぶないのか?』 セリ・ロバーツ 文 ハナネ・カイ 絵 大山泉 訳 佐藤学 解説
- 『世界の難民の子どもたち』 ①～⑤ 難民を助ける会 監修 アンディ・グリーン 作 ゆまに書房